［講演］

大学の国際化とプログラム評価

国際基督教大学講師
小澤　伊久美

○**丸山**　スーター先生、ありがとうございました。
　それでは、続きまして小澤先生、よろしくお願いいたします。

○**小澤**　ご紹介にあずかりました小澤です。よろしくお願いします。実はちょっと時間が押しているという話を伺いましたので、30 分時間をいただいていて、20 分お話しして 10 分質疑という予定だったのですけれども、15 分ぐらいを目指してお話をして、質疑は後でまとめてと考えております。

　先ほどから留学、教育交流に一番関わる日本語教育研究センターのやっていることは、大学の国際化と非常に密接に結びついているという話をずっと聞いていただいていると思うのですけれども、それをどのような形でさらに展開していくのか、いかに改善するのかということを、プログラム評価の枠組みで考えたらどうかという話をさせていただこうと思っています。プログラム評価という言葉にあまりなじみのない方もいらっしゃるかなと思いますので、はじめにそのあたりをお話しします。

　まず、話の整理のために大学の国際化というところで、私が何をイメージしてお話しするかということを確認したいと思います。いろいろな観点が考えられると思うのですけれども、一般的に今、大学は国際的に競争していかなければいけないということで、大学がどう国際的に通用する力を持っているかという話が盛んです。本日、冒頭にもお話があったと思うのですけれども、大学というのは、教育だけではなくて、研究もしていますし、実はそのほかにも社会貢献などいろいろなことをしているわけですが、大きな柱としては研究と教育があると思いま

す。研究が国際的に通用するのか、教育も国際的に通用する教育をしているのかということを考える場合、何が国際的に通用する教育なのかは分かりにくいのではないかと考えましたので、きょうは主にこちらのほうを念頭に置いてお話ししたいと思っています。**【スライド⑤-2，3】**

そもそもプログラムという言葉もちょっと誤解を招きやすいのですけれども、本日使っているプログラムは、別に留学プログラムとか、日本語教育プログラムとかいうようなレベルだけではなくて、もう少し広い意味合いでとらえたいと思っています。ある目標があって、その目標を達成できるようにお金や労力をかけてしている教育、きょうは教育の話なので教育に限っているのですが、そういうものであればすべてプログラムという名前で考えて評価することができるという前提できょうはお話しします。プログラム評価は政策についてもありますので、教育活動には限らないのですが、本日は教育ということでお話ししたいと思います。**【スライド⑤-4】**

それからもう 1 つ、学校関係者とお話ししていると、評価をかなり違うイメージの言葉としてとらえていて、話がずれてしまうということがあるので、きょうの話の中でも評価は何かということも整理したいと思うのですが、まず学校にいると、評価というのはテストでしょうと思われる方がいると思います。あるいは、大学ランキングなどもよくあるので、評価はランキングだと思う人もいると思うのですが、それだけではないということで、きょうはお考えください。**【スライド⑤-5】**

それで、では、評価という日本語を英語にした場合にどういう意味合いで使われる場面があるかというと、例えば、アクレディテーション（ Accreditation ）ですね。基準を満たしているかということで言われている言葉で、大学認証の認証というのがアクレディテーションですが、これも評価の 1 つ。それから、アセスメント（Assessment）。教師として関わっていると、一番よく目にすると思うのですけれども、例えば、財産、収入、あるいは日本語の学生たちの日本語力がどのぐらいであるかを査定する、測定するというものも評価の 1 つになります。それから、オーディット（Audit）ですが、会計の検査、監査。そして、もう少し広くエバリュエーション（Evaluation）という言葉で表せるようなもの、財産とか資料とか能力とかを評価すること。どこからどこまでが何なのというのが難しいのですけれども、きょうはこういったものをすべて含めた意味合いで「評

価」という言葉を使いたいと思っています。いわゆるテストだけではないということをまず確認してください。**【スライド⑤-6】**

それで、プログラム評価という枠組みでお話ししようかと思うのですが、そうすると、今までの話を組み合わせると、プログラム評価というと、プログラムを実施した結果、学生がどのぐらい伸びたか―それは成果と言いますけれども―というものが思い浮かべられがちですが、プログラムの成果だけではなくて、どんな問題をプログラムが抱えているのか、あるいは、これからどんな新たなことをしていく可能性があるのかといういろいろな事柄について、さまざまな視点からプログラム活動に関するデータを集めて―そしてここが大事なのですが―事前に設定してある基準に照らし合わせて価値判断を行う活動ということをプログラム評価というふうにきょうは考えていただければと思います。一番下のピンクにしたところが重要なのですけれども、ただデータを集めて、これはいい、悪いと単に決めつけるのではなくて、何に対してどうだからいいというのかという価値基準を設定するというところが非常に大事ですし、調べただけで終わらず、最後に、だからこれはいいのだ、悪いのだ、十分だ、不十分だという価値判断がなければ、プログラム評価とは呼ばないというのが評価学の中での一般的な理解です。**【スライド⑤-7】**

また、プログラム評価の目的も考えずに、ただ、評価しましょうという話をする方が多いので、幾つか代表的な例をご紹介します。まず、質保証というのは大学評価などでもよく見ていらっしゃる言葉だと思いますが、高等教育をする機関として十分な質を持っているかどうか。それから、お金を出してもらっている人、あるいは保護者、学生、地域社会などに対して、自分たちのやっている活動はこうですよということを示す説明責任、アカウンタビリティーを果たすためのプログラム評価。それから、プログラムを改善するために定期的にデータを取って改善をしていくというようなことがあるかと思います。**【スライド⑤-8】**

ここからは、あまりなじみのない方が多いのではないかなと思うのですが、評価学の中でプログラム評価をするといったときに、幾つかの切り口があります。これがあまりごらんにならない方が多いかと思うのですが、1 つはセオリー評価といいます。介入理論の妥当性です。詳しくは後でお話ししますが、介入というのは、例えば、大学で教育をするというのは、お金をかけて教育事業をしたりするということですけれども、そういうことをしない場合と比べて、その対象者、

つまり学生に、変化を与えようと思っている。そういう変化を与えるために何かの活動をしているけれども、その活動は理論として正しいかどうかという妥当性を見るのがセオリー評価です。それから、プロセス評価というのは、では、計画していることとやっていること、つまり実施過程は適切に履行されているかということを見るものです。それから、次がインパクト評価ですが、先ほど言ったような介入をした結果、どのぐらい改善されたか、変化したかということで、実際に有効だったか、改善されているかというのを見るのがインパクト評価。それから、効率性評価は割合よく見ると思うのですが、費用をかけて何かの介入をしている。その結果、お金をかけただけの価値のある変化が生まれているかを見るものが効率性評価です。例えば、お金をかけて道路を 1 本つくったとき、道路ができてよかったけれども、それはこんなに費用をかける意味があるのかという話をよく耳にすると思うのですが、その辺はこの効率性評価で見ていることになります。

また、これらを全部、総合的にするという総合評価もあります。**【スライド⑤-9】**

今から 1 つずつご紹介しますが、一番なじみにくいのは、多分、セオリー評価だと思うので、これを中心にご紹介します。繰り返しになりますが、すべてのプログラムは何らかの理論をもってその活動をしていると考えます。そのセオリー評価の中では、その活動の持っているセオリー、理論ですね、理論の中に、「こういうことをしようと思っているからこういうことをした、その結果こうなる、だからこうなる」という原因、結果のつながりがあるのですが、そのロジックは、どんな論理が前提とされているのか。その論理は妥当なのか。また、実現は可能なのかということを評価するのがセオリー評価です。**【スライド⑤-10】**

そのときに、よくロジックを言葉で説明するだけではなくて、モデル化して考えましょうということをしてロジックモデルと言われるのですが、インプット、詳しくは後でお話ししますが、インプットがあって、そのインプットを入れた結果、何かの活動があって、活動を起こすと、直接にこういう結果がアウトプットとして出て、もう少し長期的に見ると、こんなアウトカムが出るというようなことをフローチャートで考えていくというロジックモデルを一般的によく考えます。**【スライド⑤-11】**

インプットは日本語にすると「投入」と普通言われるのですけれども、何か活

動をするためには、事前にまずお金を準備したり、人間を配置したり、設備が必要だったりという資源が必要ですね。こういうものをインプットと呼んでいます。そのインプットを集めて何かの活動を行うことをアクションと呼んでいるのですが、活動を実施するためのプロセスすべてをアクションと呼んでいます。そういう活動をした結果、何かが生み出される、例えば、教材ができるとか、学生が大学に入るとかいうようなことをアウトプットと呼んでいます。そのアウトプットは直接すぐに見える変化としての結果ですが、それが将来的にどのような効果、影響として出てくるかというのがアウトカムです。このアウトカムが、中期的に見た場合、長期的に見た場合で、どの辺のことをアウトカムと呼ぶかというのはちょっと変わってはくるのですけれども、直接すぐに見える結果とは分けているというところで、アウトプット、アウトカムを使い分けています。多分、言語教育をやっていると、インプット、アウトプットといったときに全く違うものをイメージされると思うので、ご注意ください。**【スライド⑤-12】**

あまりいい例ではありませんが、例えば、こんな感じで、インプットにはこんなものがある、アクションとしてはこんなものがある、その結果、アウトプットはこうなるというようなことを書き出していくことが、ロジックモデルを書くことです。ロジックモデルを書いてみて、この流れは妥当性がある、分かりやすいし、確かにこうなるだろうと考えるのがセオリー評価です。こうやってみると、この論理の流れはおかしいでしょう、外部要因としてほかにもこんなものがあるんじゃないの、このとおりいかないじゃないのということを発見したり、そもそもこのような論理には飛躍がある、矛盾があるというようなことを見つけたりしていくのがセオリー評価です。**【スライド⑤-13】**

プログラムをデザインするときには、まずアウトカムを考えて、そのアウトカムに到達するためにはどんなアウトプットがあって、そのためにはどんなアクションを起こしたらよくて、そのためにはどんなインプットが必要かというバックワードにデザインするというのが、いいかなと思うので

すけれども、**【スライド⑤-14】**大学の国際化の場合、このスライドにがいいかどうかは別として、例えば、こんなふうに考えるという意味です。まず、国際的人材を育成したいと思った、そのためには、まず学生が専門知識とか、技術とか、思考力、異文化コミュニケーション能力を培う必要があると考え、そういう力を培うためには教育活動が必要で、そのためにはこういうものが必要だ、というようなものです。このように考えていくことによって、この流れが本当にいいかどうかという検討ができますし、もっと細かく書き出してみると、矛盾があったり、外部要因がかなり大きかったりということが見つかっていくのではないかと思います。また、こういうロジックでいったときに、果たして改善効果が出たかどうかを見るためには、何のデータがどう変わったら改善があったと言えるのかを決めなければいけないのですが、その何のデータかというのが指標と呼ばれるものなのですけれども、こういう枠組みでロジックの流れが決まらないと、指標が見つけられないということになります。**【スライド⑤-15】**

次に、プロセス評価は、先ほど申し上げましたけれども、計画と実施がずれていないかどうか。例えば、授業を 10 時間やりますという計画なのに 5 時間しかやっていないというようなことがないかどうかを見るようなものがプロセス評価です。**【スライド⑤-16】**

インパクト評価は、プログラムによって何か改善効果があったのか、あったとしたら、それは十分だったかも評価するというものです。**【スライド⑤-17】**外部要因のおかげで改善されたのではないですよねということを見ていくのが①番のほうになります。そうしましたら、その次にできることは、確かに改善効果はあったけれども、それをやるために投じた人的資源、物的資源、あるいは時間は果たしてそれだけ必要だったのか、投じたものに見合った成果なのかというのを見るのが効率性評価です。ですから、インパクトは大きいけれども、それに対してかなりの投資をインプットのところでした場合、こんなにお金と時間をかけるのであれば、改善効果は多少小さくなるけれども、もう少し効率のよかったやり方に変えるほうがよいのではないかという判断が、効率性評価の結果、出て来る可能性があるわけです。**【スライド⑤-18】**

こうやってみると評価といってもいろいろなことがやれるのですが、評価をしましょうと言ったときに、その評価の目的を考えずに実施されることが多いのが問題の 1 つだと言われています。何のためにする評価なのか、説明責任を果た

すのか、プログラムを改善したいのか。説明する場合には、誰に対して説明するのかということも考えなければなりません。さらには、評価が出た場合にどう利用するかも全く考えずに、ただ単に評価に走ってしまうと、評価はしたが結果を有効活用できなくて、単に疲れて終わるということが起こりがちです。評価対象が同じ、例えば「大学」を評価すると言っても、誰に対して何のためにするかで、何のデータを使うか、どう活用するかは全く違います。例えば、この間ある集まりで出ていた話では、大学がよく保護者のための説明責任として、少人数教育をしています、就職はこんなところに行きましたというデータを出すけれども、保護者に聞いた結果、そういうデータではなくて、就職後の満足度、定着度というデータのほうが知りたいのだという声が上がったのだそうです。これも評価のデザインの問題だったと言えるでしょう。

それから、先ほど申し上げた指標、何のデータを使うかということですけれども、どのデータを使うかは非常に判断が難しいケースが多いです。何のために何をしているかという、そのセオリーがうまくできていないからということが多いのですが、どんなデータに基づくか、そしてそれをどの基準で判断するかを考える必要があります。例えば、学生の満足度を指標としようと考えた場合も、ただ単に学生の 80％が満足すればいいのか、似たような大学の学生さんたちよりも満足度が高いというのがいいのか、世界で何番目に満足度が高い大学になるのがいいのか等々、いろいろな基準が考えられるのですけれども、どの基準にするのか、その基準で本当に見たいことが見えるのかというのを考えないといけません。その前にそもそもロジックが妥当でない限り、例えば、日本語教育プログラムでよくありがちなのが、学生の日本語力が伸びていないのはプログラムのせいだと言われますが、果たしてそうなのか、もともと集まっている学生のスタート時の能力や資質のせいではないかとか、外部要因のせいではないかということです。そのようにロジックに問題がある可能性も大きいのです。**【スライド⑤-19】**

留学生受け入れのロジックの場合、例えば、留学生を受け入れるという活動をしています、それに対してこういうインプットがあるとして、活動の目的はキャンパスの国際化なのでしょうか、そうだとして、それはつまりどういうことなのでしょうか。それは外国語の運用力が伸びることなのか、学生相互の交流による気づきが増えることなのか、いろいろなことが考えられるのですが、国際化という言葉だけではみんなが何を狙っているかが見えない。あるいは、国際的人材を

育成することが目的だと言われるけれども、それはどんなことなのか、誰のことなのか、留学生が国際人材になるのか、日本人がなるのかというところも分かりませんし、こう並んだときに、果たしてこれはうまく並んでいるロジックかどうかというようなことも考えないといけないのかなと思います。**【スライド⑤-20】**

日本語教育プログラムの話も同じで、プログラムがあって、一般的に大学の日本語教育のプログラム評価といったときに、留学生の日本語力がどう向上したかという話に終始しがちなのですが、本当にそれでいいのか。これは直接の結果だけれども、その先に何を狙っているのか、大学の国際化を狙っているのか、何なのかというあたりが分からない限り、これはロジックとして適切なのかというのが問題になると思います。

先ほどディドロ大学の話でちょっと面白いなと思ったのは、日本語のレベルを上げようと一生懸命に努力した結果、留学生が忙しくなってしまって、日本で達成しようとしていた修士の研究をするという時間がなくなっている可能性があるのではないかというご指摘です。留学生のために日本語力を高めてあげようと思った活動が、留学生の満足度を逆に下げている結果になっている可能性もありますよね。この辺、一体自分たちは何を狙っていて、関係各位がこれで満足しているかどうかというのを見ながら、プログラムの内実を変えていく、あるいは進めていく必要があるのではないかと思います。**【スライド⑤-21】**

プログラム評価は面白そうだからやろうと思う人は結構いるのですが、やろうと思ったときに知識、スキルがない、あるいは、まわりの人が、評価もう大変だからやめようと言ってしまう、実施しようと思っても、データ採取を一から始めるのは大変だという声が少なくありません。それから、評価結果が出ても生かせないから、何かやってもつまらないというようなことがあるのですけれども、**【スライド⑤-22】**小さな取り組みから始めてみて、評価を実施してよかったねという人を増やしていって、成功体験を共有するといいと思います。そうして取り組んでいけば、データも少しずつ増えていくのでやりやすくなっていきますし、勉強しようという気持ちが関係各位に出てきて、知識も増し、評価を実施する環境がだんだん整っていくので、小さな取り組みから継続してやっていくといいのではないかなと考えています。立教大学でもぜひプログラム評価を有効に活用していただければと思いました。**【スライド⑤-23，24】**

以上です。

○**平山**　小澤先生、ありがとうございました。

では、次が本日最後のご発題となります。池田先生、よろしくお願いします。

【スライド⑤-1】

大学の国際化と日本語教育プログラム
ープログラム評価の観点からー

小澤伊久美　（国際基督教大学日本語教育課程）

1

【スライド⑤-2】

大学の国際化

■大学の国際通用力

1. 研究
   - 国際的に通用する研究をしているか
2. 教育
   - 国際的に通用する教育をしているか

それがどのようなものかわかりにくい

2

【スライド⑤-3】

国際的に通用する教育か

☞　プログラム評価

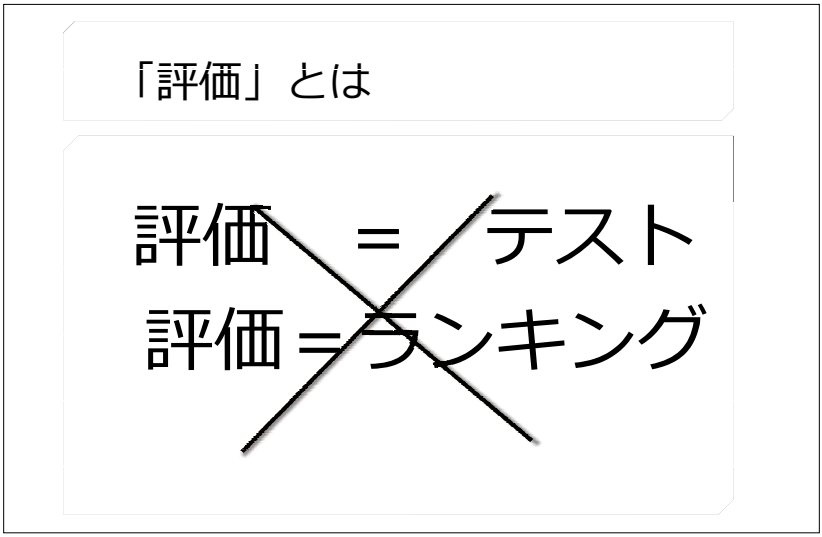
3

【スライド⑤-4】

「プログラム」とは

■ ここでは「ある目標を立てて、お金や労力をかけてしている教育（学習支援）活動」全てとする

【スライド⑤-5】



【スライド⑤-6】

【スライド⑤-7】

では「プログラム評価」とは？

ここでは「プログラムの成果のみならず

問題点や新たな試みの可能性も含めた
さまざまなことがらについて

多角的な視点から

プログラム活動に関するデータを収集し

事前に設定した基準に照らして

価値判断を行う活動」とする

【スライド⑤-8】

プログラム評価の目的

■質保証

■説明責任

■プログラム改善

8

【スライド⑤-9】

プログラム評価の種類

■セオリー評価　（介入理論の妥当性）

■プロセス評価　（実施過程の適切性）

■インパクト評価　（介入の有効性）

■効率性評価　（費用と有効性の効率性）

■総合評価　（上記全ての総合的評価）

9

【スライド⑤-10】

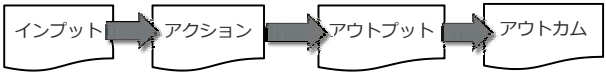
1．セオリー評価

■全てのプログラムは何らかの介入理論（セオリー）に基づいている。

■セオリー評価では、セオリーの論理（原因と結果のつらなりからなるロジック）を明らかにし、その妥当性や実現可能性を評価する。

【スライド⑤-11】

ロジックモデル

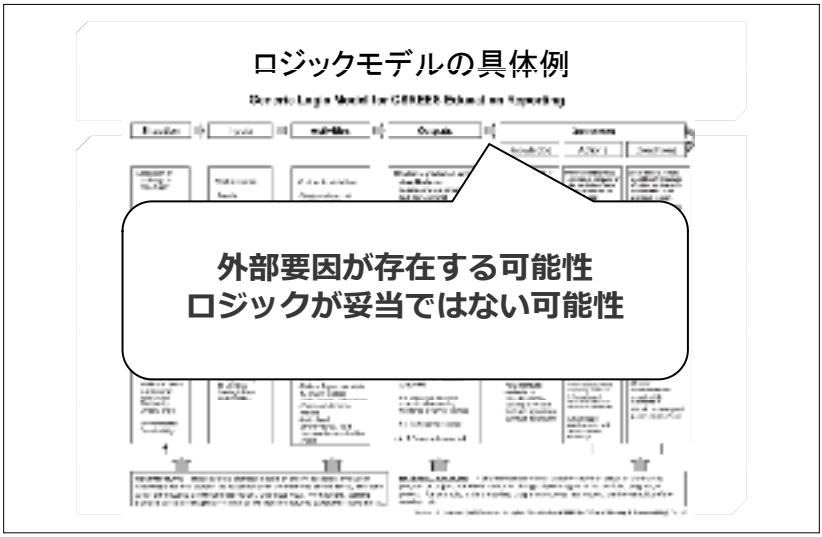


【スライド⑤-12】

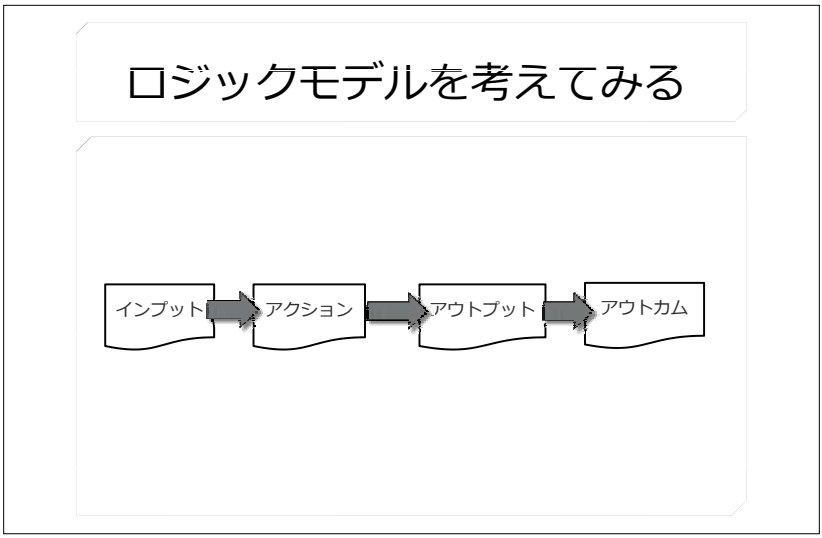
ロジックモデル

インプット（投入）	活動を実施するために投入された財政的・人的・物的資源
アクション（活動）	活動を実施するためのプロセス。インプットを動員して特定のアウトプットを産むために行われる行動・作業。
アウトプット（結果）	インプットならびにアクションによって、産み出される直接の結果。
アウトカム（成果・効果）	活動がもたらす効果や影響。

【スライド⑤-13】



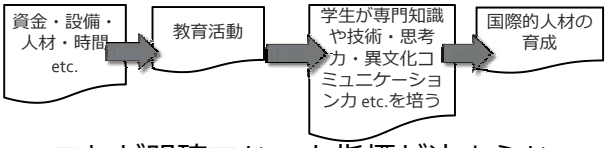
【スライド⑤-14】



【スライド⑤-15】

ロジックモデルを考えてみる

■まずは大きな枠組みをバックワードに



■これが明確でないと指標が決まらない

【スライド⑤-16】

2．プロセス評価

■プロセス評価は、計画と実施過程の差を明らかにし、実施過程の適切性を評価する。

【スライド⑤-17】

3．インパクト評価

■プログラムによって、

①対象の「改善効果」（インパクト）があったのか、

②あったとしたらそれは十分だったか、を評価する。

【スライド⑤-18】

4．効率性評価

■プログラムによって実現したインパクト（改善効果）は、限られた資源（人的・物的資源、時間など）を投入して実施するだけの価値があったかどうかを評価する。

【スライド⑤-19】

評価計画で忘れられがちなこと

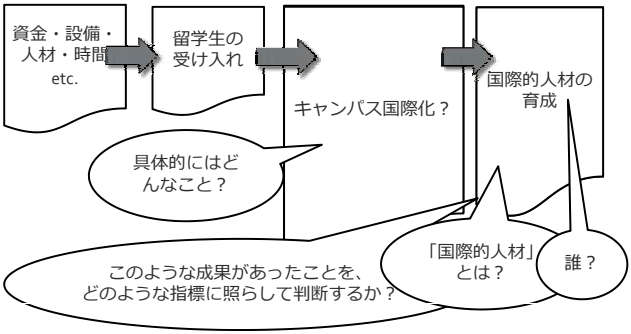
- 目的
  - ❖ 何のための評価か
  - ❖ 評価結果をどう利用するか
- 指標
  - ❖ どのデータに基づいて判断（評価）するか
  - ❖ 何を基準に判断（評価）するか

評価対象が同じでも、調査の要点や活用するデータが異なる

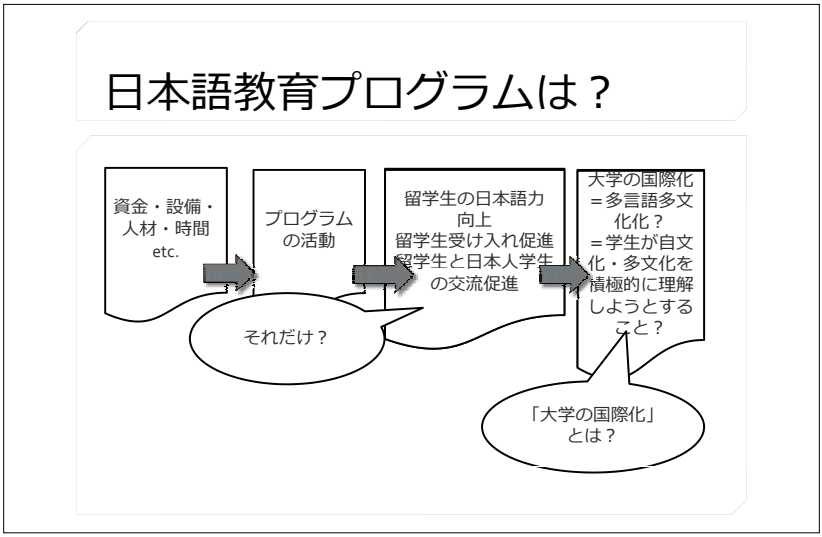
ロジックは妥当か

【スライド⑤-20】

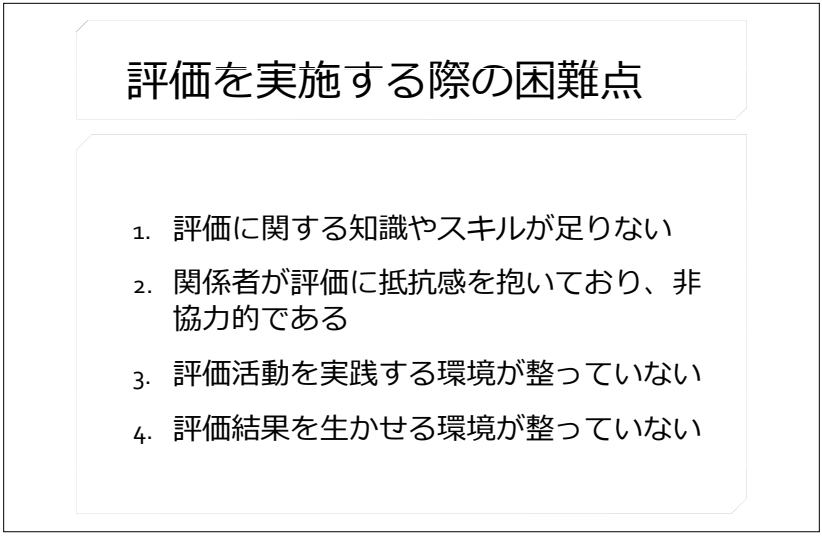
留学生受け入れのロジックは？



【スライド⑤-21】



【スライド⑤-22】



【スライド⑤-23】

さいごに

■小さな取組からでよいので、
評価を実施してよかったという
成功体験を積み重ねつつ、
実施環境を整える。

■プログラム評価を有効に活用しましょう

【スライド⑤-24】

参考文献

- 大塚雄作（2012）「これからの大学評価を考える:評価の原点に立ち返って」『大阪大学大学教育実践センター紀要』8号、57-70
- 功刀滋（2012）「学生の学習成果・達成度の評価を巡る問題点-専門教育を中心に-」、平成24年度大学評価フォーラム「『学び』からみる高等教育の未来」
- 隈井正三・松下達彦・渡邉有樹子・札野寛子（2009）「日本語教育おけるプログラム評価－意義・現状・提言－」『2009年度日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会
- 佐々木亮（2009）『大学の戦略的マネジメントー経営戦略の導入とアメリカの大学の事例』多賀出版
- 齋藤貴浩・林隆之（2007）「学位授与機構による試行的大学評価事業の評価」『日本評価研究』7巻1号、33-46

【スライド⑤-25】

参考文献

- 佐藤由利子(2010)『日本の留学生政策の評価-人材養成、友好促進、経済効果の視点から』東信社
- 大学評価・学位授与機構（2010）『大学評価文化の定着ー日本の大学教育は国際競争に勝てるか？』ぎょうせい
- 札野寛子（2011）『日本語教育のためのプログラム評価』ひつじ書房
- 龍慶昭・佐々木亮 (2004)『「政策評価」の理論と技法（増補改訂版）』、多賀出版
- ピーター・H・ロッシ、マーク・W・リプセイ、ハワード・E・フリーマン（2005）『プログラム評価の理論と方法』日本評論社（大島巌他訳、原典は2004年の第7版）
- Patton, M.Q.(1997).Utilization-Focused Evaluation, Thousand Oaks: Sage Publication.

25